

領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業 ～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～（第2期）

代表者：河野貴大（看護学部）
 分担者：吉本好延（リハビリテーション学部理学療法学科）
 加納江理（静岡県立大学看護学部）
 赤石ゆかり、小出弘寿、松下太一（北斗わかば病院）
 連携機関：北斗わかば病院

背景

パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経難病は進行性であり、神経変性をきたす神経の系統や支配する身体部位により様々な症状・障害を呈する。

現在、病院の機能分化や在院日数の短縮などにより、神経難病療養者は在宅で過ごすことが主体となっている一方で、実際に在宅療養を支援する訪問看護師は病状のアセスメントや判断、介護サービスの調整などに不安や困難感、負担感を抱いており、先行研究においても同様の報告がされている。

2018年「神経難病療養者支援者の会」発足

在宅療養者が病期に応じて必要な支援を受けることができるように、支援者のスキルアップを目的とした研修会や交流会の企画・運営を行う。

メンバーは病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師など多施設・多職種で構成されている。

2023年度の目標と活動

- 1) 神経難病療養者の在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上
- 2) 神経難病療養者の支援に関わる多職種間の「相談しやすい関係づくり」の推進
- 3) これからの浜松市の在宅医療・介護を担う学生が地域における専門職の連携を学ぶ

神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

7月22日（土）県内の医療系学生を対象とした研修会

参加者は26名（学生20名、看護師5名、作業療法士1名）

ICTを活用したコミュニケーション支援に関する講義の後、研修会の参加者を4グループに分け、4つのブース（透明文字盤の体験、視線入力装置の操作体験、オリジナル入力スイッチの体験、iPadを活用した入力体験）を体験した。

学生は他大学の学生とも積極的に交流し、透明文字盤や視線入力装置の操作を体験していた。



ICT救助隊による講義

7月23日（日）専門職者を対象とした研修会

参加者は31名（看護師11名、作業療法士11名、言語聴覚士4名、理学療法士3名、介護福祉士1名、ケアマネジャー1名）

※研修会の内容は22日（土）と同様



透明文字盤の体験



視線入力装置の操作体験

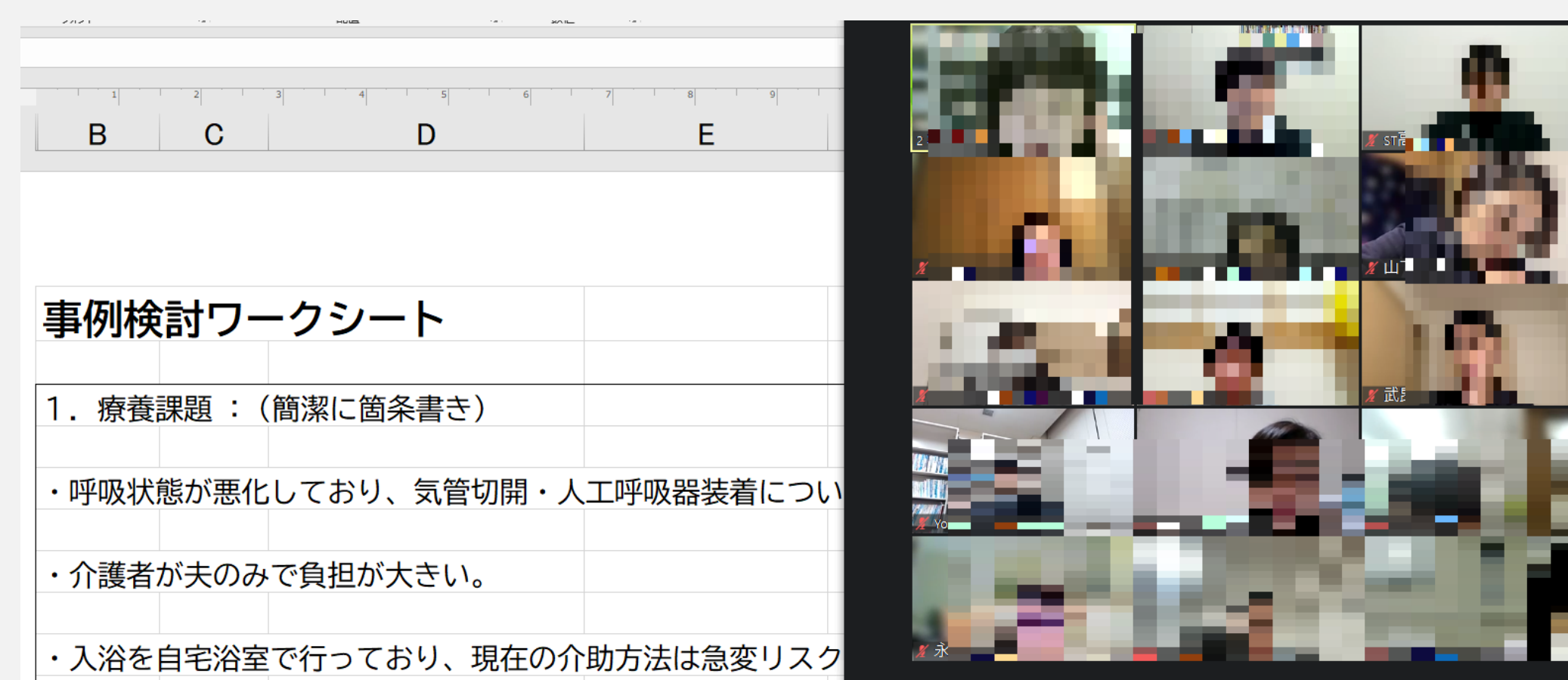


分身ロボットの操作体験

神経難病療養者のよりよい支援を目指して －課題整理のツール※を使った事例検討会－

参加者は20名（看護師10名、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士7名、ケアマネジャー2名、薬剤師1名）

オンライン上で事例の状況について、グループワークや課題の共有を行った。



オンラインによる事例検討会



※「訪問看護のための難病看護事例検討ツール－看護の糸口をさぐる－」
<https://nambyocare.jp/product/product2#2-7>

2023年度の活動の評価と考察

- ・どの研修会も参加者の満足度は高く、有意義な時間であったと回答している参加者が多かった。
- ・研修会後のアンケートでは、「多くの人と関わることができて良かった」「これからも研修会を定期的に行なっていて欲しい」といった意見が多く、交流や学習の機会の確保は継続的な課題であることが考えられた。
- ・大学生がコミュニケーション機器に触れ体験し、関心を持つことは、神経難病療養者が住みやすい浜松を創ることに繋がると考える。次年度は医療系の大学生だけでなく、高校生や中学生に向けた研修会や交流会も計画していく。